



コウホネに魅入られて

モーツァルトへの手紙 (その6)

会員番号 K.618 加藤 明

創刊以来丁度30号。この15年モーツァルトへのオマージュそれだけで書き連ねてきた。放たれた言葉を恥ずかしいとも誇らしいとも思わない。ただただモーツァルトに接近していくことを矜持としたその都度の想念だから、評価からは遠い駄文なのである。さて、どこまで近づいていけるものやら……。

親愛なるW. A. モーツァルト様
近況報告に代えて相変わらずの冗長なる駄文を送らせていただきます。
ご笑読くだされば幸いと存じます。

(たまにお誂え向きにザルツブルクシンフォニーが偶然流れ出し、そんな時は私の作業の手が一瞬止まってしまうのが常でして……)。

当産直センターはオペラ、リート、教会音楽を除いてほとんどのモーツァルトの楽曲が切れ目なく流されるというモーツァルト付き産直セ

『潟上市の産直センター (道の駅) で仕事を始めて2年あまり経過しました。

それまでの結婚式場の仕事と異なり、地元の農家の皆さんが手塩にかけて育て出荷した旬の野菜や果物などを最前線でキャッチしては即売するという活気に満ちた仕事で、願ってもない楽しい日々をおくっています。

大昔からこの地にある沼を擁し、豊かな緑と草花に囲まれた広大な公園。

そのそばに建てられた産直センターは、早朝の小気味好く張りつめた清々しさや夕方の大自然に還るかのような静寂な美しさを独り占めしているかのようです。

午前9時の開店と同時に我がモーツァルトが建物の内外に広くささやくように流れ出します



クレンペラー
モーツァルト交響曲第25番、第38番「プラハ」&第39番
東芝EMI TOCE-3262

ンターとして知る人ぞ知る、人と環境にやさしい施設なのです。

◇

先日、何気なくクレンペラーが指揮した25番（ト短調シンフォニー）を聞いていたら、突如第三楽章メヌエットに入ったところ、あの哀しみを吸い込んだままの展開部のオーボエが独りで健気に歌う小節で、どうしたものかコウホネの花（スイレン科の水生多年生植物）を思い起しました。

毎年六月になると公園内の鞍掛沼^{くらかけぬま}の片隅にひっそりとコウホネの白いつぼみがあちらこちらの水面に顔を出し、やがていくつもの凜として可憐で見応えのある黄色の花を咲かせるのです。

古くからこの沼に自生してきたというコウホネですが、漢字では「河骨」というごつい字が当てられていて、花のイメージとはおよそかけ離れた表記に驚いたものです。

それは水中にある根茎が白くゴツゴツしていて、まるで動物の骨のように見えるところから名づけられたらしい。

正岡子規は《小鮒とる わらはべ去りて 門川の河骨の花に 目高むれつつ》

と詠んでいます、自然の情景が浮かぶ好い歌だなあ、と思います。

昨年の夏、今日では貴重な絶滅危惧種とされているこのコウホネの存在を知る機会に恵まれ、以来そのたっぷりと時間を吸い込んだ沼地の風



景とともに大のファンになりました。

可憐、清楚、孤独、健気、優雅、荘厳……。観れば観るほどに、そして思えば思うほどにその深い黄色の容姿に吸い込まれそうな魅力を憶えるのでした。

いつしか水面下での根茎の複雑に繁茂している様子からは想像できない、清く屹立した一本の可憐なるこの花とその生態に魅入られていたのです。

さらに、その根茎の隙間を無数の鯉たちが舞い泳ぎ、水鳥が嬉々として飛び跳ねる協奏的な自然の演出には誰しもが我を忘れるに相違ありません。

◇

そうなのです、その感動が冒頭のクレンペラーのメヌエット、あの展開部のオーボエの凜冽な響きと重なったという訳なのです。

※ここで25番をお持ちの読者は是非あの旋律を傾聴してみてください。

ここでは弦楽合奏部はコウホネの入り組んだ根茎にあたる場所です。

モーツァルトが晩年のメヌエットでみせた天空からの恩寵といったイメージとは異なり、どこか導入部が重々しく（17歳の青年らしく）反動的ながらも荘厳さを讃えたユニゾンから次第に明るみを希求するオーボエら管楽器の展開が印象的なメヌエット。

整然としたストリングスは、美しい一本のオーボエが奏でる可憐な花びらを信頼し、しっかりと支えて微動だにしません。

できるならずっとこうして咲かせてあげたい、といった思いやりとそれが叶わぬ儚さすら暗示しつつ、誇らしげに花を咲かせているのです。

こうした感動的なコウホネのイメージは直覚的に私を現実の表象世界にまで運んでいきました。

図らずも、私のこれまでの生き様と重ね合わせてしまったのです。

《おまえもコウホネのようだ、コウホネの花のように可憐でも優雅でもましてや強靱でもないが（水面下の）たくさんの援けてくれる人たちに支えられているのだ、不器用なおまえでもその人たちが居てくれたから此処にこうして息づいていられるのだ》、という疑う可くもない根底の構造が透けて見えてきたのです。

まだ朝露が乾かぬコウホネの咲く土手に座り、己れの過去を思い起こしました、ただひたすらに……。

たくさんの人の映像と言葉が去来しました。

もうコウホネは見えなくなりました。

いつしか己れを観ていたのです。

そして、無防備なまま水面が控えめに映し出す己れをじっと見据えました。

そこには歪んだ顔に止めどなく滴る一筋のしずくが映っておりました。

また我れに還り、あたりを見まわしたら、小気味よく張りつめた清々しい朝が始まろうとしていました。

後日、コウホネの花言葉を探したら《崇高秘められた愛情》とありました。

（コウホネってモーツァルトみたいだなあ）うーん。』



死 語 の 世 界

会員番号 K.10 畠山久雄

物騒なタイトルになってしまった。死語とは何か「半分忘れられた言葉」と勝手に定義して、最近の私的コレクションとしている。

昔のポスター展にお邪魔したら「活動写真」があった。当然ながら若い人は「活動写真」が何なのか分からない。調子に乗って若い人に「総天然色」「天然色」「トーキー」と聞いて廻ったら、私の側を離れて行ってしまった。おっと！若い人とは、母がお世話になっている老人ホームの職員である。

活動写真は映画であり、総天然色はカラー映画である。「総天然色」と「天然色」には明確な違いがある。テクニカラーという言葉が微かに記憶している方もいるのではないか。テクニカラーは光をプリズムに通して分光させ、2原色法ならば赤・緑にそれぞれ感光させたものを

再び合成させて完成プリントを得る方式、したがって2倍の量のフィルムを使いながら青や黄色が表現できないなどの欠点があった。つまりテクニカラーは「天然色」であって昭和30年頃まで使われていた技術。一方の「総天然色」は今の技術であるが、忘れられた言葉である。ちなみに、昭和43年（1968年）の日本のカラーテレビ世帯普及率は4.4%でしかない。

さて、当広場会員がお世話になっているオーディオの世界にも多くの死語がある。「真空管アンプ」を筆頭とする機器、ダイレクトドライブ、ターンテーブル、インシュレーター、アーム、カートリッジ、プリアンプ、パワーアンプは何処へ行ったのか。この時代、アナログという言葉は未だ使われていない。

「エア・チェック」も死語の世界に入ってしまった。あの高価なナカミチ1000は生き残っているのか。さらに悲しいのはオープンリールデッキ、サンパチ2トラ。懐かしむ人に期待して、死語の世界には触れないことにします。若い人に通じない言葉が多く、申し訳ありません。

今や総てがデジタル化されてしまった印象を受けますが、音の入口であるマイク、出口のスピーカーはアナログです。楽器も、声も、耳も、

もちろんアナログ、モーツァルト広場で生音を楽しみ続けたいものである。

最後に私の死語コレクションから、ムービー、5球スーパー、計算尺、マラソン足袋、竹スキー、二等車、B面、ぶら下がり健康器、渡辺のジュースの素、無声映画……昭和は遠くなり

にけり。

楽 し や 五 月 —歌の力について—

会員番号 K.478 岡 部 久 子

「モーツァルト広場」でみんなで歌う「五月の歌」、大好きです。

「五月」この言葉のひびき、そのものが若々しい。さらに、キラキラする緑、甘い薫りを含んだ爽やかな風……みんな五月についてくる。

待ちかねた五月なのに、今年の四月も五月もなんと膚寒いこと（逆に真夏日の五月、という所もあったし）。残念でした。

「五月の歌」をはじめて私がきいたのは、終戦後まだ間もない頃の五年生であったか、六年生であったか？曖昧なのは、当時の事情による。終戦の年の四年生の夏は、疎開から帰って来てクラスに誰がいたか、先生は誰だったかもおぼえてない。校舎はその後、放火(?)で焼失し、土崎の二校の生徒が残りの一校に全員入って、五年生時は午前と午後に分かれた二部授業だったり——五年と六年の記憶は入り混じって混沌と、つながっている。

その頃、音楽の女の先生は秋田弁でない言葉で話す人だったから疎開して土崎へ来たのだな、と思う。そんなに若くはない先生だった。その先生が今思えばだが、随分本格的で真面目な授

業を子供達にした。

例えば音符をかいて「ツェ、エフ、ゲー」とか言って和音の練習もした。音符は頭に入ってこなかったが、その時の先生の指の形とか顔の表情、声とかは、よくおぼえている。

この先生からこの歌をならったのだ。

「タタタ、タタタ、タタタ、ター」という伴奏のあとで「楽しや、五月～」と大声で楽しく歌った。あの時の歌は編曲されていたのか、途中やおわりの部分の節が違っていった。「モーツァルト広場」で歌ったはじめの頃には最初におぼえた節に慣れ親しんでいた私はその箇所ですらいつも間違いそうになった。

今は大丈夫だけれど。

歌には不思議な力がある。

まず、「なつかしいメロディー」の力といったもの。ある知人の80才代の方から「夜、ねむれないままに覚えている限りの歌を声を出さずに歌っている…」という便りをもらった。

一つの歌をきくこと、歌うことで瞬時に、昔に帰れる。

回想の伴奏、あるいは主題曲なのだ。

私の母の場合も、きっとそうだったと思う。93才になった最晩年のことだが、或る夜中、母は急に大声を出した。驚いてベットにかけつた時、母は歌を歌っていることに気づいた。「荒城の月」だった。間もなく病院へ入った母は今度は「七つの子」を歌った。母の頭の中には一生の時々がぐるぐるめぐって来ていたのか？

私もその時が来たら歌い出すかもしれない。なるべく穏やかな歌を歌いたい。

人物についての歌、その人の「テーマソング」もあると思う。あの人はいつもこの歌を歌っていたな、という歌。

学生時代のSさんは「赤とんぼ」だった。彼は友人にも、先生にも、誰にでも遠慮なく思っていることを即、口に出す人物だった。授業も怠けたし、当然成績もよくなかったが誰にも憎まれはしなかった。そんな気ままな人物が、ひっそりと「赤とんぼ」を歌うのに私は気づいていた。忘れがたい思い出だ。

私の夫のテーマソングは、「知らない町を歩いてみたい～どこか遠くへ行きた～い」だと思う。私自身のテーマソングは？それは私自身は気づいてなくて、まわりが気づくものなのでしょう。

ともあれ毎日毎日、なにかの歌をきき、曲をきき、口ずさみ、それが生きる元気、楽しさになっている。

「レクイエム」考

会員番号 K.203 松田至弘

モーツァルトの「レクイエム ニ短調 (K.626) を聴くたびに、私はその深遠な世界に引き込まれ感動を新たにしている。

この死者のためのミサ曲には、音楽の「凄惨なまでの美と力」を強く感じる。曲は15のセクションで構成されているが、私は「ラクリモサ」(涙の日)の部分に特に哀切さを覚える。

20世紀を代表する神学者カール・バルトは、モーツァルトの曲は後期のものも若いころのものもただ一途に聴いているが、「<ドン・ジョヴァンニ>や後期の諸交響曲、<魔笛>と<レクイエム>」には強く心を動かされ繰り返し何度も聴いていると述べている。(「モーツァルトへの感謝の手紙」1955年)

これは、カトリック側からもプロテスタント側からもモーツァルトの教会音楽が無視される傾向にあった時期の発言であり、大きな影響を与えた。今日、修飾語をつけずに「レクイエ

ム」という場合、モーツァルトのそれを意味している。

あまりにも有名な曲だが、その誕生のいきさつは次のとおりである。

まず、作曲の依頼があったのは1791年の夏であろう。伝説では、灰色の服を着た痩せて背の高い男がモーツァルトの住居(ウィーンの小カイザーシュタイン館)を訪れ、依頼主の名を伏せたまま「レクイエム」の作曲を注文する手紙



モーツァルト：「レクイエム」のCD
(リッカルド・ムーティ指揮、ベルリン・フィル他)

を手渡し、高額な作曲料を示してその半金を支払ったという。

調べてみると、依頼主はウィーンから南西へ約70キロ離れたシュトゥパハ城に住む貴族ヴァルゼック伯爵28歳であった。また、訪問した使者は、ウィーン市長の息子アントーン・ライトゲーブで、当時伯爵の代理人を務めていた。

伯爵は夫人が病気にかかり結婚して4年で死亡したので、妻を追悼する行事を行うため、そこで自作として演奏する礼拝音楽を作曲してほしいと注文したのである。

契約の条件は、出来上がった曲の著作権がヴァルゼック伯爵にあること、そして、モーツァルトに作曲を頼んだことを秘密にすることであった。伯爵は音楽好きで、自分を才能ある作曲家に見せようとする癖があった。

モーツァルトが、いつ作曲に取り掛かったのかはわからない。この年は特別多忙を極めていた。

モーツァルトは、ウィーンの市参事に申請書を提出して、5月9日に聖シュテファン大聖堂の副楽長（無給）の地位を得ているから、教会音楽の面でも生き残る道を模索していたことは事実である。

従って極めて多忙な中で、対位法を生かした教会音楽の究極の作品とすべく意欲を燃やしたのである。そして、死の床にあってもなお作曲を継続したが、遂に事切れ作品は未完成に終わった。

かつては、モーツァルトを追悼するミサは最初にプラハで行われたとされていたが、今日ではそれより先に、いち早くウィーンで行われたことがわかっている。

12月5日に死去して5日目に、ホーフブルク（王宮）前のミヒャエル広場にある聖ミヒャエル教会で行われた。そして、そこで「レクイエム・エテルナ」（主よ、永遠の安息を与えたま

え）と「キリエ」（主よ、憐れみたまえ）の最初の二つのセクションが演奏された。

「レクイエム・エテルナ」だけは、ほとんど完成されていたが、「キリエ」のセクションは数人によって加筆されたのである。

それではその後、「レクイエム」はどうなったのであろうか。その辺の事情は、大変興味深いところである。

夫を亡くしたコンスタンツェが、「レクイエム」をどのように理解していたかはわからないが、経済的理由から未完成のそれをどうしても完成に導く必要があった。コンスタンツェには、育てなければならない二人の息子がいた。しかも、夫の残した莫大な借金を抱えることになったのである。

もし、契約違反をして完成作品を手渡さなかった場合、支払われることになっている残金を受け取ることは不可能になるし、また、前金の返還を求められる危険性もあったであろう。

コンスタンツェは、音楽家のアイブラーに補筆し完成してくれるように頼んだ。そして、アイブラーはそれを承諾し取り掛かったが、結果的に作曲することを辞退したのである。

コンスタンツェは、さらに数人にも打診したが断られることになった。最後に、モーツァルトの弟子といわれるジュスマイヤーに話をもたけ苦難の末に完成をみたのである。



聖ミヒャエル教会（左側）

コンスタンツェからヴァルゼック伯爵の使者に完成したスコア（手稿譜）が渡されたのは、1792年の半ばごろと考えられる。コンスタンツェは、約束されていた残金を受け取った。

そして、ここで我々は、モーツァルトが生きていた時とは違う商才にたけたコンスタンツェ像を見ることになるのである。

ダニエル・N・リーソンの著作によると、ヴァルゼック伯爵夫人の追悼で演奏が行われる前に、コンスタンツェは契約を無視して、モーツァルト作の「レクイエム」の初演を手配したというのだ。

それが実行された場所はウィーンのイグナーツ・ヤーン所有のホールで、コンスタンツェが得た利益は「レクイエム」の作曲報酬額の三倍から四倍に当たるという。そして、この演奏会にジュスマイヤーを関与させなかった。

「レクイエム」は不朽の名作と評価され、日本では特に人気が高い。しかし、「レクイエム」には多々問題があり、駄作と考える人もいる。

一方で、指揮者のアーノン・クールのように、傑作としつつ「サンクトゥス」も「ベネディクトゥス」も「アニュス・デイ」も質的にはモーツァルトによって作曲されたものであり、ジュスマイヤーのようなつまらない作曲家にそれができるはずがないと述べる人もいる。

しかし、いずれにしろ、コンスタンツェとジュスマイヤーがいなければ、「レクイエム」の運命がどうなっていたかはわからない。二人は「レクイエム」を救った人物ともいえるのである。ジュスマイヤーの果たした役割は、もっと評価されていいと思われる。

パンチと果実の日々

会員番号 K.427 鎌田展禎

「パンチを試してみよう……！」

当会の一員にして歴史研究家であられる松田至弘先生の新刊『モーツァルト——時代の寵児への旅——』を拝読して真っ先に決意したことがこの通りであるから呑兵衛根性のさもしさを自覚しておきます。

200ページを超える著作に「パンチ酒」の固有名詞が登場したのは確か一度きり——、その閃光を見逃さない業の深さもことあの人に関すれば必然の因子配分とうなずけるのです。

モーツァルトの大好物に彼の素顔を映し見ました——。



パンチ酒はアラック（蒸留酒）・果汁・砂糖・スパイス・水の5要素を大きな容器の中で

混ぜ合わせるインド発祥のカクテルです。呼称は数字の「5」を指すヒンディー語の「パーンチ」あるいはサンスクリット語の「パーンチャ」などに由来します。

モーツァルトの時代にあつては異国情緒の漂う飲み物だったでしょう——。イギリス東インド会社の船員が現地からレシピを持ち帰り、やがてヨーロッパ中に浸透したとされるオリエンタルな代物です。

各処の趣味が反映されて、《ワイン、ブランデー、ラム、etc.》がベースを担い、《レモン、オレンジ、ライム、etc.》をアクセントに添え、ご当地バージョンの百花繚乱となりました。アメリカ上陸に際しては、アルコールを除いて炭

酸を加えた“清涼飲料”としてポピュラーになり、『ハワイアンパンチ』や『トロピカルパンチ』の商品名で甘党や未成年者のファンを新規獲得しています。

日本において“デザート”のイメージが一般的であるのは、仏教伝来の反対方向から西洋経由の大回りで流入したためでしょう。



以上のごとくパンチ酒の性格は“変遷”であり、モーツァルトが愛した在りし日の姿を特定するのはたやすくなさそうです。

そこで彼の書簡に手がかりを求めようとにわか仕込みをしてみると、〈——ワインとフルーツをひと対にして間に合わせの夜食にした——〉というくだりに行き当たりました。パンチの虜となる前らしき二十歳時分の報告です。

同じ内容の手紙がほかにも残っていることから、彼の晩酌はどうやら日課であり、サカナの定番は果物だったと推理されます。

また、パンチから派生したものでもあるのか、スペイン辺りではバナナなどの雑多な果肉をふんだんに盛り合わせる「サングリア」が愛飲されており、オスマン帝国軍楽隊のリズムを『トルコ行進曲』に取り入れるほどの国際人・モーツァルトですから、この類似酒について知識があったことでしょう。

こうした背景と即興演奏の名手だった当人の資質をふまえるに、「モーツァルトパンチ」の正体とは——、数種のベースに調性を転じ、柑橘系の外にもモチーフを採り、夜ごとに無限性を帯びるフルーツミックスカクテルのバリエーションそのものではなかったかと想像されるのです。



私はあれこれと酒材を組み合わせる天才作曲家の舌にかなったテイストを飽くなく追いかけて

ました——。

アルコール度数が高いベースの主張をフルーツやミキサーが彩っていずれも意外なくらいの瑞々しい味わいに仕上がります。実にこれはモーツァルト的であると納得するわけです。

パンチボウルから注ぎ分けて飲み回すおおらかなスタイルも彼のお気に召したことでしょう。ウィーンの自宅で頻繁に催されていた遊興の折は、たむろする友人にとびきりの調合でふるまったに違いありません。

経験者の実感として、粋を尽くしたパンチはなかなか値が張ります。個人出資による研究は安価な詰め合わせのドライフルーツを併用するなどしてコスト削減に努めましたが、おそらくモーツァルトは借金をするようになってからも悦楽に妥協をはさむことはなかったような気がするのです。

周囲の証言によれば、彼がお気に入りのパンチをあおるペースは速く、作曲の合間も口に含んでは楽想の源とすることがありました。彼はいかにも“時代の寵児”らしく、遊具や煙草に山海の珍味——と、若年からいくつもの嗜好品に馴染んでいます。

「天才は——作品において、行動において——必然的に浪費者だ、自分を蕩尽することが彼の偉大さだ……」

ニーチェの独語がふとよぎりました……。



どうも松田先生の労作にかこつけて利き酒に陶酔しているきらいを否認ませんが、ものぐさな人間がレポートにいそしんだのも学校教育者として重職を歴任された著者の面目躍如ということでお許し願いたいと思います……。

出版記念会で松田先生が明言されたように『モーツァルト——時代の寵児への旅——』が

意図するところは史実の検証です。

豊富な旅行体験と長年の考察がにじみ出ている言葉の羅列は硬質な説得力があり、ご自身で撮影された写真はしばしば初見の被写体と対面させてくれました。私がモーツァルトの飲酒事情に好奇心をそそられたのも五感を刺激する往時の日常が一冊のうちに密封されているからです。

モーツァルトその人が生きた街並みを紙上に闊歩すれば、彼を身近に引き寄せるきっかけを何かしら示してくれるのでした——。

追記

モーツァルトが実際に嗜んだわけではないものの、彼の名を冠したチョコレートリキュール

が存在します。製造工程の最終2晩に『管弦四重奏曲第2番（K155）』のみをスピーカーで響かせ、高周波の作用で熟成環境を整えるというザルツブルク産の逸品です。

この銘柄『Mozart』をテーマにしたイベントは国内でも開かれ、「コンスタンツェ」などの創作カクテルを世に送り出しているとのことでした。

さて、こうもアルコール浸けのネタにこだわる筆者のおもわくを聡明な加藤代表はつとにお察しのことでしょう。

いつかモーツァルト作品の生演奏と彼にまつわる酒群を一度に堪能してみたいもの——、左党会員を代表しておねだり申し上げます！

酒とモツの日々（30）

会員番号 K.488 佐藤 滋

モーツァルトの作品に「すみれ」という歌曲（詩：ゲーテ/K.476）があります。

♪一本のすみれが牧場に咲いていた。ひっそりとうずくまり、人に知られずに。

それは本当にかわいいすみれだった！そこへ若い羊飼いの少女がやってきた。

軽やかな足取りで、晴れやかな心で、こちらの方へ近づいて来る。

牧場の中を、歌を歌いながら……。

♪ああ、とすみれは思った。もしも自分がこの世で一番きれいな花だったら、と。

ああ、ほんのちょっとした間だけでもあの少女に摘みとられて、胸におしあてられて、やがてしほむ。ああ、ああ、ほんの十五分間だけでも。

♪ああ、それなのに……！少女はやってき

たが、そのすみれには眼もくれないで、あわれなすみれを踏みつけてしまった！

すみれはつぶれ、息絶えたが、それでも嬉しがっていた。ともあれ、自分はその人に踏まれて死ぬんだから、と！

♪かわいそうなすみれよ！それは本当にかわいいすみれだった。

（最後はモーツァルト自身の作詞）

踏まれて喜んで死ぬ……これは単なるマゾヒストの歌なのでしょうか？モーツァルトはどんな想いで作曲したのでしょうか。この曲の真実を「解釈」してみましよう。

「すみれ」の立場で考えてみます。私たちは、みな夢や憧れ、初恋などを経験します。けれども、そのほとんどは実を結ぶことなく、消えたり、あきらめたり、事故で踏みにじられたりします。多く人は落ち込み、恨んだり、時には

道を誤ったり、病気になる人もあるでしょう。けれども、なかには誇りや矜持を失うことなく、自らを慰めつつも現実を見つめ、静かに運命を受け入れる人もいます。「すみれ」はそんな人たちの生き方を代弁しているのではないのでしょうか。

「少女」に軸足を移して考えてみましょう。貴方には気づかないところで、自分を愛し、憧れ、見つめてくれた人がいませんでしたか？そして深く考えもせずに、その人たちを傷つけてしまったことがありませんでしたか？もう少し足下に気を配っていたなら、踏みにじった魂を減らせたかもしれません。この曲は、貴方のこれまでの生き方を振り返らせる歌でもあると思うのです。

これらは視点の一部にすぎません。他にも、いろいろな「解釈」があるはずです。「解釈」に制約はありません。だから心豊かな演奏家の

表現には驚きと発見があるのです。さて、この曲に秘められた真実とは？

「真実はいつも一つ！」(名探偵コナン)・・・いいえ、誰にとっても等しい真実など滅多にないのです。偉大な作品は様々な解釈を受け入れてくれます。解釈は、年齢で、経験で、環境で様々に変わります。そんな解釈を拾い集めてゆくことが、音楽と親しんでゆく、ということなのだと思います。

苦かった酒が、いつのまにか疲れを癒す時を創ってくれる。堅苦しかった音楽、興味の無かった歌がいつか心の友になる。それらが「幸せ」への送りびととなるのでしょうか。

「幸せ」とは長く生きることではありません。正しく生きる、豊かに生きる、そして自分にとっての幸福とは何か、を自分の心で「解釈する」ということなのです。

事務局より

会員番号K.203の松田至弘先生の手書かれた「モーツァルトー時代の寵児への旅(冬至書房)」を皆様はもう読まれましたか？本に対してあれこれコメントをする立場にはありませんが、皆様にも是非目を通していただきたい一冊だと思いました。というのもこの本は恐らくモーツァルトの研究書だと思うのですが、とにかく読みやすい。わかりやすい。以前松田先生が秋田魁新報に発表された文書を元にまとめたものとのことですが、難しくな

く、堅苦しくなく、あっという間にするすると頭に入ってしまうコラム集のような読み物かと。

当会場にても販売しているようですので是非お求めいただきたいと思います。

また今回当会報も30号を迎えることができました。今後も会報の発行を続けるためにも会員の皆様からのメッセージ、投稿も受け付けております。代表の加藤もしくは事務局の本田までお気軽にお尋ねください。(K.575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H25年7月現在110名) [モーツァルト広場](#) [検索](#)
入会金：¥2,000 年会費：¥3,000(諸会費、別途)
お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田(事務局) 080(1673)8322